

# ユング「赤の書」 世界同時公刊

分析心理学の祖、カール・グスタフ・ユング（1875～1961年）が1913年から16年余りにわたって手書きでつづり、思想の根源に迫る貴重な資料とされる『赤の書』が世界同時公刊された。

ユングは公開を望まず、長年銀行の貸金庫で保管されていたが、心理学史研究家のソヌ・シャムダサーニ博士を中心となって、複雑なテキストを整理した。A3判464ページの豪華本。装飾文字で記され、極彩色の描画134点を交えた本文約200ページを原寸大複写で収録。活字化した本文や詳細な注釈、解説を加えている。

第1次世界大戦前夜、大地を覆う死者や血の海を何度も幻視。この心的危機を契機に、神話的ファンタジーを自ら喚起し、そこに表れる人物と対話を深める自己実験を開始した。後に〈無意識との対決〉と称した、その実験の詳細を記録し、自ら描画と分析を加えている。赤皮で装丁された大判ノートに清書したことから『赤の書』と呼ばれる。

シャムダサーニ博士の解題によると、ユング思想の中核をなす「集合的無意識」や「原型」などの概念が語られており、後半生の活動は「本書の内容を拡充し、同時代の思潮に受け入れやすいもの

に書き直していく試みだった」。

日本語版監訳者は、ユング研究で知られた河合隼雄氏の長男で、京都大こころの未来研究センター教授の河合俊雄氏=写真=。「ユングの理論が、自分の体験に基づいていたことに驚かされた。無意識に由来する圧倒的なイメージの奔流をユング自身は科学的な分析対象としたが、魂の救済を主題とした試みは芸術家や宗教者にも多くの示唆を与える」と氏は意義を指摘する。同時刊行されたのは独・英・日の3か国語版。本文と注釈、解説を邦訳し

た日本語版は創元社刊。税込み4万2000円(12月末まで3万7800円)。

